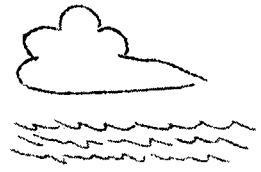


羅 針 盤

本誌刊行の意義



渡 辺 光

本誌の刊行も回を重ねて4巻目となった。このことは、新制大学の制度によれば、丁度1サイクルを終ったことになる。初巻が出たとき、あどけない少女として地理科に入学して来た学生が、いまは4年生として後輩学生の指導的の立場にある。この辺で一応本誌の現実的のあり方について考えて見ることも、意義なしとしないであろう。

本誌の刊行を企画した所由のものは色々あった。当時のことを顧みるに、そのオーには本学の地理学教室が年々十名を越える卒業生を世に送るに当って、卒業生の相当の努力を頼むけ、従って、方法についても、内容についても相当見るべきものがある卒業論文が世に現れることなく、教室の後輩に利用されるのみであることを惜しみ、せめてそのレジュメなりとも記録に留めて世に問いたいということであった。

いま一つの重要な理由としては、先輩と後輩及び教室との繋がりをつまでも密に係ち度いという気持ちからであった。それには野心的に考えれば、色々なことも企図されようが、まず本誌のようなものの中に教室便り、学生の活動状況などを盛るし地理科の現況を伝え、新旧職員、卒業生、学生の名簿を整備すると共に、卒業生からも便りを載いて消息欄に掲載するような、極めて簡単な内容のものから始めたらよからうと考えたのである。その他、色々な名案もあろうが、何分にも卒業生在学生の数も少ない同窓誌として、あまりにも理想に走った野心的な試みは、却って実行をはばむものと考えられたので、今ではごく内輪のものに留められている。もちろん将来の内容の充実は望ましい。しかし、本誌のような意図の刊行物は、徒らにある特定の時期の充実を誇るよりも、永続性にこそ最大の意義と価値とがあるものと考ええる。

どうか地味に末永く続くように、先輩諸姉の御後援をお願いすると共に、在学生の熱意を期待し、同窓生のよい意味のむつみのきずかなとなるように、本誌を発展させて載きたいものである。